
デバ地下でデート

一色強兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デパ地下でデート

【Nコード】

N8276D

【作者名】

一色強兵

【あらすじ】

SMクラブで働くM女さん、麻美さんは最近欲求不満気味。その原因はよくある話ですがお客さんにありました。同僚の先輩からはそれはあなたがラッキーなのよと諭されますが。そんな麻美さんの前に現れたちよつと格好いいけど変なお客様。全然やりたいことが分かりません。訝しく思いながら彼の言うとおりにしていたら、麻美さん、すっかりメロメロにされてしまいました……。春エロス2008参加の微エロチューン作品です。

ブローグ

「麻美さん、行ってくれる？ センチュリーホテルなんだけど」

「ええ、いいですよ。どんな声でした？」

「うん、落ち着いた感じだったかな。あんまり緊張しているようには聞こえなかった。何？ どうかしたの？」

「いえ、この間のお客が、」

「何？ 何か変なことされたの？」

「あ、いえ、そういうんじゃない、何ていうかな、とにかく慣れてないというか」

「慣れてない？ 別にそんなの不思議でもないでしょう、今更。S Mプレイが初めてのお客さんは多いわ」

「あ、S Mじゃなくてですね、その、どうも女性とつきあうこと自体に慣れていなかったみたいで」

「何よ、それ。もしかして童貞くんだったってこと？」

「もしかしたらそうかも……。でも歳は四十八だって伺ったんですけど」

「ま、あんた、それって大天使って感じじゃない。それで、どうなつたの？」

「それが……、結局ホテルで一緒にお茶を飲んだだけで終わっちゃって、さすがにお金を下さいって言いだしにくくて……。一応は頂いたんですけど、どうしても百パーセントとはいかなくて」

「まあ、それは大損害ね。形だけでも何かしてくれないと……。まあよほどの決意でここに電話してきたことは間違いないんでしょうけど。物事にはステップってもんがあるのにな」

「でもなんか私、この商売を始めてから、考えてみたらあんまり普通に責められた覚えって無いんですけど。いきなり足を舐めさせてくれとか、あるいは縄持参で来たのはいいにしても、何もかも初めてで、まともにできなくて、謝まらればかりだったとか、自分で

はSだつて言つてゐる癖に踏んでくださいとか……。なんかこう、私はMとして問題があるんですかね」

「アハハハハ。なんか、欲求不満になつてゐるのは麻美ちゃんの方みたいね。まあ私に言わせればそれは麻美ちゃんがラッキーだつたつてことよ。大変よ、本物のS男くんばかりだったら。身体中痣だらけにされるから」

「確かにそうでしょうけど。でもこういうクラブには来ないでしょ、そういう人」

「ま、少ないわね。こんなSMごっこ程度の遊びでは満足はできないでしょうし。そういう意味ではこの商売は意外と安全ね。けどね、時にはすごく厄介なヤツもいるから注意しなさい」

「どんな？」

「普通のSつていうのとはちょっと違うのよね。滅多にいないんだけど、責め方を研究してるマニアみたいなやつ。女をすごく冷静に観察してその女に一番向いたやりかたを仕掛けてくるの。決まった技じゃないから何を考へてるかさっぱり分からないし、責め方がとにかく巧妙で、身体だけじゃなくて、氣がついた時には、お金も心も全部相手に貢がされてる感じになるのよ。これが一番厄介ね。だいたい一方的にやられまくつてゐるのに相手を恨む氣持ちがちつとも湧かないから、どうしようもないの」

「それは辛いですねえ。でも自己申告とか、勘違い野郎ならともかく、本当にいるんです？ そんな男。自称天才調教師だったら私も何人か会つてますけど、ホントに自称でしたよ。ヤクザならアリかもですけど。真珠、入れてるんでしょ」

「昔と違ってヒモ稼業のヤクザは少なくなつたわ。AVビデオでも撮つた方がよっぽど金になるもの。真珠入りでなんて昔はともかく今の子に通じるなんて思えないわ。みんなおもちゃで自習済み」

「なるほど、そっか」

「ま、何にしてもそんな男は希少種だから心配することはないけどね。商売上はつまらない男の方が何かと好都合。自分の妄想に勝手に

に酔ってる男がいいお客なの。だから、あなたは絶対ラッキーよ。
じゃ、しっかり稼いでらっしゃい」

「はい」

麻美は渡された予約メモを持ち、ポシエットを肩にかけ、颯爽と
出陣した。

パンストはダメよ？

目的地であるセンチュリーホテルの客室を真っ直ぐ訪ねる。

ピンポン

「はい、ちよつと待つて」

若い男の声が中から聞こえた。

「あのう、お電話を頂きましたエンゼルフィッシュから来たんですけど」

すぐに鍵を開ける音がしてドアが開いた。

「お、早かったね、じゃ、入って」

ドアを開けたのは髪をきつちり七三に分けた、黒縁めがねの背が高く、細身の若い男だった。ネクタイはしていないが、シャツは色つきでも柄入りでもない、全く普通のワイシャツだ。またズボンも濃紺の、上下セットのパンツのようだ。出張で宿泊しているビジネススマンかな、と麻美は思った。それなら平日の夕方電話をしてきたことも頷ける。

と同時に、低い声といかにも育ちの良さそうな顔と物腰に少々麻美は気持ちが上がることになった。結構タイプだったのである。すかさず指をチェックする。薬指には何もなかった。

ドアを締め、ハーフコートを脱いだところで麻美はサービスの前口上とも言える説明を始める。

「本日はエンゼルフィッシュをご利用頂きありがとうございます。最初に簡単ではございますが私どものサービスの内容を確認させて頂きます。まず本番行為はいかなる場合でもお断りしておりますので、ご了承下さい。それから……」

「ああだいたい分かつてるからそれぐらいでいいよ。料金は前金かい？ それとも後？」

麻美は引いてきたソフトキャリーケースの中に納めた道具を見せようとジッパーを開きかけた。それが売上げ増加につながるからだ。

「あ、でも、一応その前に私どものサービスを確認して下さい。え」と、ご用命はお客様がSで、二時間ということ承っておりますけど…… よろしいですね？ それと今日のプレイにつきまして、何か特別なご要望はございますか？ 簡単なものですが鞭、ろうそく浣腸などもご用意しております。また今日は特にナース、セーラー服、ボンデージの入荷したばかりの衣装もお持ちしておりますので是非ご覧頂きたいと思います。あの、もちろん定番の縄や拘束ベルトもご用意しておりますから、是非ご利用下さい。ご利用料金は相場よりもかなり安めにさせて頂いておりますので」

だが麻美の営業トークに、男はほとんど表情を変えなかった。一応話は聞いてくれているのだが、麻美が今まで見たことのない程、妙に態度が落ち着いているのだ。どう見ても男が性欲をたぎらせているようには見えなかったのである。そもそもハーフコートを脱いだ麻美の服はそれなりに扇情的なデザインで、白いふとももをアピールする深く切れ込んだサイドスリットのあるタイトスカートや、胸元がレースアップで深い谷間がはつきり見えるブラウスなのだが、彼の視線はちつともそれらを見ていないのだ。

麻美の経験からすれば、この若さにしてはちよつとあり得ない反応と、言ってもいいような気もする……。案の定、男はあっさりとその道具とコスプレ提案を断った。

「いや、今日はそういうことをするつもりはない。基本サービスだけがいい。金額はこれでよかったはずだね」

ちえ、せつかく苦勞して持ってきたコレクションなのに……、エクストラはなしか。思ったよりケチくさいのね、こいつ。それともマイロープ持参のマニアなのかしら。どっちにしても、ついてないなあ。SMはオプションサービスで儲けられるのがおいしいのに。やっぱもうちよつとオタクっぽい外見のヤツの方がいい商売になるんだろうな。全くうまくいかないわね。

が、麻美の心中に浮かんだ不満が通じたのか、男が札入れから出した金は電話で伝えてある金額よりも少しばかり多かった。

「これ、ちょっと多いようですけど」

「あ、それはチップ、クルマ代ね」

「あ、そうですね、どうもありがとうございます」

へー結構、気前いいじゃん。

受け取った金を自分のポシェットにすぐにしまう。

「では始めましょうか、何をすればよろしいのです？」

麻美がその声をかけると、男は初めて麻美の方をちゃんと見た。

そして目を細め、その全身をくまなく観察しているようだった。暫く黙ったままだったが、麻美がその視線に耐えられなくなり、ちよつと身体を動かすと、

「じつとして！」

と強く言われた。

男の観察はまだ続いた。中腰になり、やがてしゃがんだ。まるでカメラマンが撮影アングルを決めるためにあらゆる方向からの見栄えをチェックしているかのようだった。

何を考えているんだろう、麻美は初めて男に対し積極的な興味を持った。

「うん、だいたい決まった。それじゃあ、そのストッキングは脱いで」

「えーと、あのう、ストッキングですか？」

「うん、それ、パンストだろ？」

「え？ ええ。そうです」

「パンストは困るんだ。僕が用意したストッキングに履き替えてくれ」

裸になれば、全部脱げ、あるいは下着だけになれば、というようなお客なら普通にいるが、パンストだけ脱げ、しかもこっちのストッキングに履き替えるというのは麻美にとって初めてのリクエストだった。無論、裸になる覚悟でここにいるわけだから、そんな要望は別に何ともない。ただ何をやるうとしているのか、見当がつかないことが不安だった。

スカートを腰のところまでたくしあげ、ヒールを脱ぎ、ベージュのパンストを下ろす。下に穿いているパンティはブラックレースに赤い縁取りがしらわれたもの。高級感はかなりある。パンストがそれを覆っていたのだが、それが無くなっていいよそれらしいムードを強めた。

「じゃ、これを。ガーターは知ってるね」

男がストッキングともう一つ別な布の入った二つの袋を麻美に手渡す。

「ベルトからクリップで留めるやつでしょ」

「いやそうじゃない。ベルト無し。太もものところでストッキングを上から押さえるサポーターみたいなやつ」

「へえ、それは初めてです……。こっちで押さえるんですね」

「そうだよ」

男から渡されたストッキングは、別に際どいカットがあるとか、扇情的な色をしているとか、荒い目のメッシュであるとか、そういう要素は一切無かった。ちょっと白っぽいベージュで、模様など一切無しのプレーンなものだ。透明なビニール袋に納められているのだが、商標など売るための表示はどこにも無い。

しかし、出してみれば手触りといい艶といい、また生地自体の厚みといい、かなりの高級品に間違いはなかった。

「これ、ずいぶん良さそう。日本のものじゃないの？」

「気に入ったかい。それはフランス製なんだ。たぶんサイズも問題ないはずだが」

その通りだった。ほとんど誂えたように足にぴたりとフィットした。

先ほど渡されたガーターをそのストッキングの一番上のところに重ねるように足を通す。かなりきついゴムで、痕が残るようなのが気になった。あんまり長くは穿かない方が良さそうだ。

お散歩プレイ

「できました。これでいいの？」

スカートを下ろし、ヒールを履き、男の前で立ち姿を見せる。

「うん、いいみたいだな。それじゃ、今度は手錠をつけさせてもらうよ、手を背中に回して」

着衣のままの拘束というのは麻美には意外だった。滅多にないけどまあそういうのが好きという人はいる。だけどそれだつて下着姿、あるいはコスプレみたいなもので行うのが普通だ。こんな当たり前の格好のまま拘束を始めたお客さんは初めてだった。

変わったお客さん、と思いながら麻美は手を後ろに回した。

男は自分の黒いバッグを開けて中をゴソゴソとかき回している。

そして細いチェーンのついた手錠をそこから出した。ただしその手錠は麻美も見ただことの無いものだった。手首を通す部分は8の字型でくっついていて。つまり鎖はいらないはずなのだが……。

男は麻美の両手首に背中のところでもその手錠をかけた。腰の上あたりでぴったり合わされて括られたので、ほとんど両腕とも動かさなくなった。ただし、腕をまっすぐにしてさえいればそれほど窮屈ではなかった。

「ヒッ、な、何を」

「じつとして。すぐ済む」

男はいきなり麻美のブラウスを背中をめくりあげていた。ブラウスの背中に回った部分を持ち上げられた。そして同時に手首が手錠ごと引っ張り上げられた。

「よし、もういいぞ」

シャツは元通りにされた。が、二つ違和感があった。一つは背中に金属の冷たい感触が残ったこと、そして腕をまっすぐ伸ばせなくなったことだ。手錠につながったチェーンがブラに止められたらしい。手首は腰のあたりで交叉した形で止まることになった。単純な

8の字ではなく、角度が変わる手錠らしい。思ったより手首の自由度が大きくおかげで肩や手首から痛みが出ることはなかった。

「いったい、何をするんだろう……」

麻美には男の意図が相変わらず見通せない。

自分の知らない責めを男がしようとしている……

麻美の心の中に不安と期待が交錯しはじめた。

聞いても教えてはくれないだろうが、とにかく質問してみることにした。

「これで何をするんです？」

「ま、言ってみれば、一種の変態プレイってやつだな。これから一緒に外をお散歩しようっていう趣向だよ」

男がちゃんと答えたのは意外だったが、中味は驚くようなものでも何でも無かった。

「なんだ、お散歩プレイか。」

一回だけだが、そういう男が居た。しかしそれはほぼ全裸で、深夜のホテルで五分ほど廊下に出されるというものだった。ドキドキしたことは確かだが、それがお客さんにとってどうして面白いと思えるのかはよくわからないというのが正直な感想だった。

期待して、損しちゃった……

男の方は、またバッグからものを出していた。但しそれは責め具でも何でもない、ごくごくありきたりの五百CCペットボトル入りのコーラ。キャップを開け、三分の一ほど残っていた中味を目の前で飲んだ。そしてボトルを持ったままバスに入ってしまった。

すぐ戻った男の手にあったボトルはかなりの量の水で満たされていた。

男は麻美の間近でしゃがんだ。

「ちよつと失礼」

無造作にスカートが持ち上げられた。そして股の間にペットボトルが突っ込まれる。

「いきなり変なものを身体に突っ込まないで下さいよ。無茶なこと

したら訴えます」

突然のことに麻美は思わずそう言った。時折とんでもないものを入れようとするヤツがいるのだ。だが男はその言葉にちよつとだけ顔を上げただけだった。

「心配しなくていいよ、ここに挟んでもらうだけだ。ちよつとパンティを使わせてもらうけどね」

秘丘を覆う黒レースをほんの少し指で持ち上げ、隙間に青く平べったいひもを通された。そして先ほどのボトルの中央にもそれをするくると巻き付けた。そのひもにはマジックテープがあるらしく、隙間無くピッタリ巻き付いた状態で麻美のパンティの股間部直下にペットボトルをしっかり固定してしまった。

「さて出来た。それじゃ散歩に行きましょうか」

男は元通りにスカートを下ろし、それから麻美が部屋に入ってきた時、テーブルの上に置いたハーフコートとポシエットを持ち、まずポシエットを首にかけさらにハーフコートを上から羽織らせた。麻美の準備が済むと自分も上着を着てドアに向かった。

「さ、いきましょ、お嬢さん」

露出している部分はないし、拘束といっても後ろ手錠だけ。スカートの中のペットボトルはちよつとだけ歩きにくいがそれ自体外から見えるものでもなく、何がSMプレイになっているのか、麻美にはさっぱり理解できなかった。しかし男に反対する理由も見つからないので、言われた通りに部屋の外へ出た。

困ったペットボトル

「時間、あんまり無いと思いますけどいいんです？」

「三十分もあればじゅうぶんだよ。さ、こつちだ」

駅前のホテルなので人通りは多い。六時前、まだ宵の口だ。男はホテルに隣接するデパートに入っていた。そして真っ直ぐ地下へ直行。

何で地下なんかへ？

仕事帰りの兼業主婦でこつたがえしている食料品売り場を歩く。

男なんかほとんどいない。女だらけの空間だった。

「あそこがいいな。フレッシュジュースでも飲もうじゃないか」

男の指し示した先のコーナーには、売っている果物をその場でミキサーにかけて作るフレッシュジュースを飲ませるスペースがあった。周囲の買い物客との境界は床から立てた高さ一メートルほどのポールとポールの間をテープで結んだだけの柵だけである。だから柵沿いの席ともなれば、その横を、食料品を買い求める客がゾロゾロと行列になつて通り過ぎるという状態になる。

そして男はまさにそういう席に陣取った。

なんか、やな感じ。

麻美にカンが走った。

言われるがまま恐る恐る椅子に腰掛ける。座れないことはない。ちゃんと座れる。だが、股間にあったペットボトルは椅子の座面に押され、真っ直ぐ上向きに持ち上がる。それはちょうどスカートの中央あたりにニヨキとした出っ張りを作ることになり、スカートそのものを見事なテントに変えるポールとなった。

男の狙いが分かった時にはもうどうしようも無かった。その異様に膨らんだ股間を隠す方法は麻美には無かった。しかも男の目線ではその膨らみはテーブルに隠されて見えない。つまり彼は堂々と知らんぷりができる。一方、テーブルの脇で行列を作っているおばさ

ん、いやオバタリアンたちからは、ちょっとだけ脇見をすればいくらでもその異様に膨らんだ状態を見ることが出来る。

麻美がそのことに気がつくよりも早く、間近で交わされるヒソヒソ話が耳に届いた。

「ちょっと、あゝた、あれ、何？ ほらそこに座ってる女の方」

「ちょっと、なに、あれ、やだ、もしかして、ニューハーフ？」

「まあ、ほんとだ。でも分からないわね、あれが見えなかったら、どう見ても女よ、すごいわ」

誰のことを言っている会話か確かめる勇氣は麻美には無かった。ただひたすら背を丸くし、少しでも股間が目立たなくなる姿勢を取り下を向き続けた。

だがいくら時間が過ぎても人混みは一向に減らない。次から次へと新手が来る。しかも麻美を話題にしたヒソヒソ話はオバタリアン特有の、声高な話し声となって麻美を容赦なく打ちのめし続けた。た。

「若くてきれいなんだから、さっさと切っちゃえばいいのに」

「まあ、カゲキ！ でもやっぱり、いざとなると度胸がいるんじゃないの」

「それにしても相手の男は分かってるのかしら、あれ、女じゃないって」

「さあ、鈍感な男も多いらしいし」

「それにしても、あれって、何？ ずっとあの大きさ？ もう、興奮状態？ 何ヤラシーこと考えてるのかしら、それとも、もっと大きくなるの？ どんだけ大きいのよ」

「もう、やめなさいよ、こっちが恥ずかしくなっちゃう」

手錠というものがこんなに辛い拘束だと思ったことは無かった。またさらに言えば、同性の目がこれほどコワイと思ったことも無かった。

「ご注文は？」

「ああ、僕はオレンジジュース、君は何がいい？」

麻美は俯いたまま小さく言った。

「同じでいいです」

「あ、はい……、か、かしこまりました。オレンジジュース二つです
ね」

動揺した声を上げたウェイター。しっかり見られたらしい。

「ボク、だめよ、そっちは行っちゃいけないの」

「えー、なんでー。ボクノドがかわいたー、ジュース飲みたい」

「どうしてもダメなの。とにかくこっちに来なさい。早く……、ほ
ら、あっちにもっとおいしいのがあるから、ほら、早くしないと置
いていくわよ」

ジュースに引かれてこちらに近づいた子どもを必死に止める母親。
麻美は耳を抑えなくなる一方だった。手錠が恨めしい。

ようやくジュースが来ると、男は麻美のジュースにストローを差
した。

「さ、どうぞ」

そして何事もないかのように自分もジュースを飲む。

「暑くないかね、そのコート？ 脱がないと変に思われるかもな。

ここはかなり暑いし」

その通りだった。だが脱げるわけがない。

ま、まさか、この手錠まで彼等に見せるつもりなの？

麻美は男の言葉に内心を凍り付かせ、表面上は聞こえなかったふ
りをした。しかし首を伸ばして少しだけ口に含んだジュースの味な
どさっぱり分らない。

一方男の方は麻美の反応を気にする様子もなく残ったジュースを
ゆっくりと飲んでいる。

そうか、これも一種の言葉責めなのか。

麻美もとにかくそれを飲み干さないことにはここから動いてもら
えないと思い、あわてて残りを飲んだ。

ブラがピンチだ

「じゃ、そろそろ行こうか」

男は大きな声でそう言った。それは麻美にとっても待ちこがれた言葉だった。しかし男の言葉はまだ続いていた。急に声を小さく絞った。

「これからが本番だよ」

男の言葉を詮索する余裕は麻美にはない。が、すぐに新たな異変が麻美を襲った。

そんな！

立ち上がった瞬間パンティがずり下がったのである。腰掛けたおかげでペットボトルはパンティを肌から引き剥がしながらテントを作っていた。そのせいでパンティがもつともお尻の膨らんだところから抜けたのである。自ら縮もうとするパンティはもう下へ向かうだけだった。そこにボトルに入った水の重みが加わったのだ。パンティは一気に下がった。

麻美は慌てて股を閉じペットボトルを強く締めた。パンティが下がるのはとにかくこれで止められる。だが、その状態では少なくとも普通には歩けなかった。

見れば男はさっさと勘定を済ませ、はるか先でこちらを振り返っている。麻美は無表情を崩さない男の目に喜悦の色を見た。

飄られている……

麻美はそれを深く思い知らされた。周囲の視線が恐い。自分の横をすり抜けていくオバタリアンも多い。妙な形で衝突されないことを密かに祈りながら、男にしずしずと近づいた。太いペットボトルを自分の内股の肉で強く挟みつける。麻美は特に内股が弱かった。小学校の時からうんてい棒は苦手だった。ふとももで鉄パイプを締め付けると、その快感で力が入らなくなって上れなくなる。そんなだから、それよりもずっと太いボトルに抗えるわけがない。すぐ力

が抜ける、落とさないようにするためにはそれに抗ってさらに力を入れなければならない。麻美はすぐににっちもさっちもいかない状態になった。

「い、一緒に歩いて……先に行かないでください……、お願いします」

やっとの思いで男のところに辿り着いた麻美は、思わずそんな声を出していた。パンティがフラフラに浮いた状態になっていたのだ。ペットボトルを上を持ち上げることにはできない。これ以上下がるのを食い止めるのが精一杯なのだ。そしてその力は麻美の肉欲をも刺激し続けるものだったのである。いやそれだけではない。それ自体、麻美の身体を一層敏感にしてしまうものでもあった……。

麻美がそれに気づいたのは、ボトルと太ももの接触面に湿ったようなぬめった感触があることに気がついて、であった。もちろん汗もあるだろう。だが、汗だけでこんなにぬるぬるになるわけがない。男はそんな麻美をさらに奈落に突き落とす言葉を小声で投げかけた。

「おやおや、これ、君の臭いなのかい。香水も負けるほどのメスの臭いを撒き散らしているとは。下の方はもしかしたら大洪水かい？」
周囲のおばさんがその臭いに敏感でないわけがない。必ず変だと思ったのがいる……。

そう思うだけで麻美は絶望に襲われ、泣きたいほど惨めな気分を味わうことになった。下を向いたまま、僅かに首を縦に一回振った。が、一方でその強烈な被虐感、禁断の快楽そのものでもあった。

「これはかなり堪えたのかな、それとももう落としそうなのかい？」

「はい、もうこれ以上支えられません。落としそうです」

とにかく今の切羽詰まった状況を何とかしてもらうことが先決だった。

「弱ったな。じゃあ、自分の手でペットボトルを持って」

「手錠で届きません」

「こうすれば、届くだろ」

男の手が麻美の背中に載せられた。ハーフコートは薄く柔らかい素材だ。男の手を背中にはつきりと感じた。

「きゃ」

麻美は悲鳴を出しかけ、すぐにそれを呑み込んだ。

男はコートの上から一瞬でブラの背中中のホックをはずしていた。チエーンがはずれ手首がぐんと下がり腕が真っ直ぐになった。男が言った通り、ちょっと力を入れたら足に挟んだペットボトルをスカートごしに触ることができた。身を少しよじり、麻美はとにかくスカートの後ろ側をやや引っ張り上げるような形でそれにくるまった。ペットボトルを手で持った。

だがそれは麻美に新しい困難をもたらすことでもあった。

ホックをはずされたブラは何とシャツの中でずり落ちたのである。男はブラに手錠を結びつける際、肩紐を切っていたらしい。つまりブラはホックだけで留まっていたのだ。カップが引つかかるからブラウスの外にブラが落ちる可能性は低いだろうが、位置のずれたブラで正面側の見栄えはかなりおかしくなった。まだ乳首はブラの一部に隠れているが、ズレがこれから大きくなったらどうなるかわからない。またブラは前側に倒れたらしく、シャツの胸の膨らみが浮き上がったブラのせいで、妙に大きくなりやたらと目立つことになった。

そしてハーフコートの前はボタンをしていない。そんな状態を、危険な好奇心に満ちたオバタリアンだらけの場所で晒すのだ。

麻美は生きた心地がしなくなった。

ありがたくない親切

落下を手で止めたペットボトルはそのままである。それはパンティと一緒にされているから、股間から完全に抜き去ることは出来ないのだ。かと言って手を離したら、パンティと一緒に足もとに落ちてしまう。麻美は中途半端な状態に置かれていたのだ。

周りに群れている全オバタリアンが自分をじっと見ている……。そんな気がしてならない。だが男は再び歩き始めた。麻美は少しでも自分の姿が周囲から隠れるように男に必死になって寄り添って歩こうとした。

男に目的地はないらしい。買い物客の如くデパ地下の内部をあつちの売り場こつちの売り場とふらふら歩く。端から見れば若夫婦が商品を冷やかして回っているようにも見えるだろう。

だが麻美はともそんな気分にはなれなかった。人が多いからだでさえまっすぐ歩けない。しかもそんなところで、商品棚の前の通路にしゃがみこみ、製造年月日とか生産国とかを確認でもしているのか、一つ一つの商品ラベルを丹念に見て選んでいる困ったおばさんも多い。その姿勢の意味することは麻美が低いアングルから観察される危険があるということである。

だから彼女たちに対する注意だけで頭はいっぱいだった。さっきの店でさんざん言葉責めに合わされたことで植え付けられた、同性の目に対する恐怖が麻美を縛っていたのだ。

だがさらに麻美は追い打ちをかけられることになった。

「お一ついかがですか、新製品です。どうです？ 今夜のおかず」「ほら、安いよ、安いよ、ほらすごく新鮮でおいしいから、騙されたと思って一切れ試食してみて、奥さん」

などと次々と話しかけられる。不自然きわまりない姿勢を強いられた麻美にまともに受け答えをする余裕はもろろくない。

だいたい手を前に出せない麻美は彼等には最初からタカビーっぽ

い、嫌な客に映っているはずだ。そうとなれば何となく胡散臭そうな目で見られていることは間違いない。

なんて辛い目に遭わしてくれるのよ。エクストラをもらう口実なんかない？ 絶対基本料金だけじゃ割が合わない……。

と思いつつも麻美の被虐による興奮もまた高まっていた。

呼びかけをかわそうとして、すばやく腰を回転させれば、今度は自分で自分の秘所をペットボトル先端の出っ張りで小突きまわしていた。

それは火のついた被虐心にはちょうどいいスパイスで麻美をいよいよ切羽詰まらせることとなり、喘ぎ声を口の中で噛み殺さなくてはならなくなった。

だが男の責めはまだ終わっていないかった。

男は何と姿を消したのである。

一瞬目を離れた隙に男は忽然と姿を消していた。

麻美は必死になって男を捜した。

だが、いくら周りを見回してもどこにも男の姿を見つけれない。麻美は焦った。

「お客様、お身体の具合がお悪いのでは？」

おかしな格好できよろきよろしていた麻美の姿はよほど人目を引いたのだろう。デパートの制服を着込んだ、まるで入社したばかりという感じの若い女性にいきなり話しかけられた。胸のバッジには「新入社員 研修中」と書いてある。

返事が満足に出来ない麻美にさらに彼女は話しかけてきた。

「あちらに休憩室もございますがご案内しましょうか？」

彼女に今の状態を知られたらと思うと麻美の動揺は一層激しくなった。やっこの思いで声を出す。

「いえ、その、だ、大丈夫、つ、連れと、そ、その、ちょっと、はぐれちゃって……」

「アナウンスでお呼びいたしましょうか？」

じよ、「冗談じゃない……、名前だって知らないのに……」

「い、いえ、だ、ダイジョーブ、ホントに、いいから」

「はあ。はい。で、でも、あら、お客様、ブラが変になってませんか？」

思い切り顔をブルブル振って、麻美はそのしつこい店員から逃げた。

周りの視線が恐い。

麻美は必死になって男の姿を追った。バレた時、男が近くにいないと自分がなんでこんな姿なのか説明できない。手錠だつて男がいないとはずせない。下手をしたらレスキューとかわけがわからない人がいっぱい来るかもしれない……私が自分一人でやってるだけの自縛嗜好の変態にされてしまう。冗談じゃない。絶対やだ、そんなのは……。どこ、どこにいるの？ お願いだから姿を見せて……。

雑踏をかき分けながらかなり無理をして早く歩いた。おかげでペットボトルはまるで電動マッサージャーのように激しく秘丘を叩き、ブラはブラウスの下の方へと完全にズレ下がり、乳首には直接ブラウスが時折接触する感触が伝わってきた。おそらく目をこらせばブラウスの下に乳輪が透けて見えるはずである。

だがそんなことにかまってはいられなかった。立ち止まったらまた誰かから話しかけられる……。

精神的に追い詰められた上にペットボトルとずれたブラというのはきつかった。気がつけば麻美の息は上がり、乳首は一層固く敏感になり、自分で自分を深く責め懲っていた。

またデパ地下へ

麻美がようやく男を捜し当てたのは、階段の踊り場だった。彼は
その喫煙所で悠然とタバコをふかしていた。

「どこに消えたかと心配したよ」

男は麻美の姿を認めると白々しくそう言い放った。

「も、もう部屋に戻らないと時間が……」

麻美に余裕は全くない。この地獄のような空間から一刻も早く出して欲しい。そんな気持ちしかなかった。それがこの言葉に繋がっていた。だが、

「時間？ まだ一時間はあるよ。もうちょっと遊ばしてもらってもいいんじゃないのかい」

お金は返すから今すぐやめて欲しい、と言えればいいのだが麻美には言えなかった。ここまでやらされて今更金を返すなんてとんでもない。部屋にさえ戻ればエクストラチャージでこれまでの分を取り戻せるチャンスも生まれる。しかし男はベンチに腰掛けたまま、悠然と煙をくゆらすだけで一向に動くとはしない。

そうこうしていると一人のおばさんが彼の隣に腰掛け、おもむろにタバコを取り出し、火をつけた。男の前に立っていた麻美は思わず正面を隠すように身体を横に向けた。が、おばさんは、麻美の様子を時折チラチラと横目で見ると、明らかに何か不審を感じたように詮索していた。

歩いていけば、ペットボトルにくつついたまま宙ぶらりんになっているパンティに気がつかれる心配は無いのだろうが、止まっていたはその変なシルエットに気がつかれる……、いや、その前に乳輪がやばい。それにハーフコートの丈はもとも短いし、スカートだつてペットボトルと一緒に掴んで持ち上げているのだ、下手すると変なモノが後ろから見えているかもしれない……。

高まる羞恥に麻美はまたも身体を凍り付かせた。

思わず振り返り男の顔を見る。

男はそんな麻美の様子を、目を細めて見ていた。

また、私を黴ってる。この男、何も気がつかない振りをしているが、何から何まで私の心の底にあるものを見ている……。

その瞬間、麻美の背中にゾクツとするものが走った。

最初に私をじっくり見ていたのは、私という女がどういう弱点を持っているのかを探っていたのだ。そしてそれに合わせた責めがこれだったのだ。あの部屋で裸に剥いて縛り上げ責め黴っても、それをどうこう思うような女じゃない。私のことをそう見たのだ。

麻美はようやくこの男のことが分かったような気がした。

うそをついても、演技をしても瞞せる相手じゃない。

この男には勝てない。

麻美は心の底から観念した。

が、それだけではなかった。麻美は自分のこともわかったのだ。

そう、麻美は今まで経験したことのないほどの興奮を、男に見られていると自覚するたびに味合わされていた。何故そこまで興奮したかと言えば、麻美の身体が男の視線を求めているからであり、男に辱められることが麻美の喜びだったのだ。階段の踊り場で男をようやく見つけた時、麻美の身体は喜びに震えていたのである。麻美はようやく自分の身体の希望に少し素直になれた。

少しベンチから離れていた麻美はまたベンチに座る男の真っ正面に戻った。男は相変わらず悠然と煙をふかしている。隣にはおばさんもいた。だが麻美は躊躇わずに自分の正面を見せこう言った。

「このコートを脱がしてくださらない。私、暑くて堪らないわ。もう手錠もボトルもみんな見せてしまっつかまわないから」

麻美は自分の気持ちを素直にそう伝えた。聞き耳を立てていたであろう隣のおばさんは、心の底で何を思ったかはわからないが少なくとも表面上の変化はない。だが、男は今までの能面のような表情を変えた。口元に笑いが浮かんだ。

「ほづ……いい子だ。だがそいつはちょっともったいないね。少な

くとも今の君は僕のものなんだから。ここで公共サービスをする気にはなれないな。もうここは終わりにしよう」

男がドアを開け麻美が駆け込むようにホテルの部屋に戻った時、麻美は一つの決意をしていた。

「お願いです！」

麻美がそう声を出した瞬間、ペットボトルとパンティが麻美の足下に落ちた。

男は麻美のハーフコートを脱がしながら言った。

「わかってるよ、手錠をはずせばいいんだろ。ちよっと待って」

「い、いえ、そうじゃなくて、……」

「でも時間ないんですよ」

男が麻美のブラウスの前を持ち上げると、コロンとブラが転がり落ちた。

「……抱いて下さい」

「抱いて、って、本番は絶対ダメだって最初に言ってたじゃない」

「いえ、その、もう、商売はどうでもいいです」

男は麻美のその言葉を聞くと焦ったような表情を浮かべ慌てて手錠をはずしにかかった。

深い考えが麻美にあったわけではない。その男の小心さを見て、急に腹が立ったのだ。すべては一瞬のことだった。だがこの一瞬で麻美の決意は微妙な軌道修正が行われた。男が手錠を外した瞬間、その手錠は麻美に強引に奪い取られた。そして麻美の行動はそれだけでは終わらなかった。

男の顔は狼狽に歪んだ。

「お、おい、何をするつもりだっ！ 悪い冗談はやめろ。俺は客だぞ」

さきほどまで麻美の両手を拘束していた手錠が今度は男の両手首を後ろ手に拘束することになっていた。

麻美はすかさず大外刈りの要領で、男の足のかかとに自分の足を絡ませ、上半身を強く押した。男は小さく悲鳴を上げ、バランスを

失いその場で尻餅をついた。

だらしなく開いた男の股間を麻美はハイヒールで踏みつける。男がまたヒツと悲鳴を上げた。

「言っただしょ、商売はもうどうでもいいって……。さっきのデパ地下のデート、とっても刺激的で素敵な責めだったわ。褒めてあげる。この商売始めてからここまで私を切羽詰まった気持ちにしたのはあなたが初めてよ。で、私決めたの。この男は絶対私のものにするよって。興奮した女はコワイってことぐらい、あなたほど女に詳しい男なら当然知ってるでしょ。今日のこれからのセッションはあなたが私に調教される時間になるの。うちのクラブはS女要望にもお応えできるように、男を責め懲る方法もちゃんと研修で教えてくれるのよ。で、これからあなたのこと、私好みのDOMにしてあげようってことね。もちろんタダよ。大サービス。あなたほど女の気持ち分かるなら、女王さまに好かれるいいマゾになれるはずよ。まず口だけで私の服を脱がしてもらおうかしら。それがマゾ男の礼儀だから。それがちゃんとできたら、そうね、次はやっぱり鞭？それともこの浣腸の味でも覚えてもらおうかしら。お腹を浣腸液でいっぱいにしたまま、デパ地下でもう一回お散歩してもらおうかな。あの刺激はきつとヤミツキになるわよ。ほら、分かったら返事の代わりにワンって言っのっ！早くっ！」

麻美は男の頬に思い切り平手打ちを浴びせた。

男が「ワン」と言ったのはそのすぐ後のことだった。
了

またデパ地下へ（後書き）

謝辞

「デパ地下でデート」読いただきありがとうございます。

さて、なんだこれは？　と思われた方、あなたの疑問は正解です、とまず申し上げさせて頂きます。

「春エロ2008」に参加された他の一部作者さんもそれなりに悩まれていたようですが、ギリギリのエロとは何か、ということについて、それぞれの作者さんがどのように解釈したかというのも競作の見所だと思います。

今回「春エロ2008」に参加するにあたり私は18禁SM小説書きの立場から「微エロ小説」の定義を作ってみました。

即ち「微エロ小説とは、読者を、焦らし責め、放置責めにする小説である！」というものです。

このコンセプトによって産まれたのがこの「デパ地下でデート」だというわけです。

一向に本格エロシーンへと向かわないまま終わりを迎え、悶々鬱々な気分を抱え込まれた読者の皆様には大変申し訳なく思いますが、これはそういう作品なのだとすることで何卒ご了解の程お願い致します。

それではまたの機会にお目にかかれることを楽しみにしております。

一色強兵

PS

拳動のあやしいカップルをデパ地下で見かけたら「あんたら変態じゃない？」と暖かい（冷たい？）一声をかけて協力（邪魔？）してあげましょうw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276d/>

デパ地下でデート

2010年10月8日13時46分発行